

体験型海外教育実地研究

-第5学年異文化理解 What are there annual events?-

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 安田 知佐子

1 はじめに

今回、体験型海外教育実地研究に参加しようと考えたのは、海外の小学校で授業を行えるというチャンスに興味を持ったからである。また、近年は国際化社会が進み、小学校でも外国語活動が取り入れられたことから、小学校段階から異文化交流や異文化理解は必要となり、今回の体験は今後の実践に役立てることができるのではないかと考えた。私は、英語が苦手であり、言葉の通じない子どもたちを相手に授業を行うことができるか不安であったが、もともと海外や国際交流に興味があり、この貴重な体験が自信につながればよいと考え、参加を決めた。

2 実地研究の日程と概要

		交通等	訪問地・用務等	泊
4/16	木	履修等, 説明会 C527		
5/7	木	14:40-16:00 C505	渡航までの日程や諸準備の確認	授業研究テーマの設定方法
6/4	木	14:40-16:00 C505	授業研究テーマ案の交流	
6/30	火	米国グループ(米国よりタッカーさんほか計15名)来学・高美が丘中学校訪問		
7/1	水	14:30-15:40	同上	三ツ城小学校訪問・午後は日米教育事情懇談会
7/9	木	14:40-16:00 C526	学習指導案の検討	
7/18	土	L104 第5回学校間交流国際フォーラム(レッドフォードさん・クーパーさん)		
7/19	日	C527 2009 体験型海外教育実地研究報告書作成のワークショップ		
7/30	木	14:40-16:00 C526	学習指導案の検討	渡航のための諸手続き
8/27	木	14:40-16:00 C526	学習指導案の検討および教材・教具の作成	渡航のための諸手続き
9/3	木	14:40-16:00 C526	学習指導案の検討および教材・教具の作成	渡航準備
9/9	木	14:40-16:00 C526 直前打ち合わせ		
9/12	Sat	広島-成田 0745-0925 (NH-3128) 成田-ワシントン 1105-1045 (NH-2) ワシントン 1235-1345 ローリー (UA-7144)		City Hotel & Bistro 203 W. Greenville Blvd, Greenville, NC 27834
9/13	Sun	Home party and meeting at Dr. Carolyn Ledford's	Preparation of Lessons Meeting	Greenville
9/14	Mon	City Hotel → Elmhurst School	School Visit Elmhurst E. S. (K-5) (Ms. Suzanne Hachmeister) Observation/ Teaching Meeting and Preparation	Greenville

9/15	Tue	City Hotel → Elmhurst School	School Visit Observation/ Teaching Meeting and Preparation	Greenville
9/16	Wed	City Hotel → Elmhurst School	School Visit Observation/ Teaching	Greenville
9/17	Thu	City Hotel → Raleigh	School Visit *Meeting with Mr. Kevin *Exploris M. S. (6-8) *Museum Visit	Holiday Inn RALEIGH (CRABTREE VALLEY MALL) 4100 GLENWOOD AVE RALEIGH , NC 27612
9/18	Fri	Sheraton → RDU Raleigh 1025-1130 Washington Dulles (UA-197)	Traveling to Washington DC Study on the American Culture	WASHINGTON PLAZA 10 Thomas Circle, N.W. Washington DC 20005 202. 842. 1300. /800. 424. 1140
9/19	Sat		Study on the American Culture at Historical Place	Washington DC
9/20	Sun	Hotel → Airport		
9/21	Mon	ワシントン 1220-1525 成田(NH-1) 成田 1725-1900 広島(NH-3129)		
10/12	木	事後指導 発表会		

3 実地研究授業

3.1 単元等名 第5学年 異文化理解 What are there annual events ?

3.2 事前準備

①単元設定の理由

今回の授業を行うにあたって、まず、アメリカの子どもたちに日本のことを知ってもらいたいという気持ちがあった。また、今回の授業をきっかけにして、それぞれの国々に文化があり、伝統があり、面白さがあるということに気付き、自国の文化だけではなく、他国の文化にも興味を持ってもらいたいという願いがあった。

このような考えから異文化交流の授業を提案し、題材には年中行事を取り入れることにした。年中行事は、その国の歴史、伝統、文化に関わるものである。昔から、人々によって守り伝えられてきた年中行事には、人々の思いや願いが込められており、一つ一つに意味がある。そして、中には、外国から入ってきたものもあり、他国の影響を受けながら国は成長しているのだということもわかる。両国の行事から、文化の相違を比較し、その面白さに気づくことができればと考えた。

②準備物とその意図

○日本の年中行事の写真（正月・ひな祭り・七夕）

日本の代表的な年中行事として、正月、ひな祭り、七夕を選ぶ。この三つは、日本の年中行事の中でも、特徴的かつよく知られているものである。

特に正月は、年の初めを祝うものとして日本人に親しまれている。おもちやおせち料理などの食べものほか、年賀状やお年玉などのお正月特有のイベントごともある。このような習慣は日本特有のものである。また、外国にも新年を祝う習慣はあっても、その祝い方は国によってさまざまである。国の特徴がもっとも反映されている行事として取り上げることにした。

ひな祭りと七夕については、インパクトがあり、アメリカの年中行事にはないものとして、紹介することにした。

写真は、正月を門松と鏡餅を、ひな祭りはひな壇の様子を、七夕は短冊が結ばれている笹の葉の様子が写されたものを準備している。いずれも、行事の代表的なものであり、その行事の特徴がでている。

○スゴロクゲーム

子どもたちには、楽しんで日本の年中行事を知ってもらおうと、ゲームを用いたグループ活動を取り入れることにした。その際、日本、独特のゲームとしてスゴロクを提案する。スゴロクゲームは、グループで楽しめる上に、ゲームのルール自体も簡単なため、児童も親しみやすいのではないかと考えられる。また、マスごとに行事を提示でき、スタートからゴールまでの流れがつかめるため、年中行事の流れを理解するには適しているのではないだろうか。

また、スゴロクゲームでは、日本とアメリカの両方の年中行事を紹介しており、重なる行事については同じマスの中に位置づけた。それぞれのマスには説明とミッションを用意し、ただコマを進めるだけではなく、ミッションをこなしていかなければ先に進めないというルールも作っている。また、日本の行事には説明を加えているが、アメリカの行事には、説明を付けていない。アメリカの子どもを対象に行う授業であるため、自国の行事についてはすでに知っているものと予測し、説明をつけず、子どもたち同士で説明させるようにした。自分たちの言葉で説明することで、自国の文化についても再確認できるのではないかと考えた。ミッションの中にはグループで協力しなければならないものもあり、グループでのコミュニケーションも図っている。

子どものコマには折り鶴を用意した。ゲーム終了後には、本時の思い出として、各折り鶴をプレゼントしている。

③日本風のポストカード

各班の優勝者には、優勝賞品として日本風のポストカードを準備した。日本らしいものにこだわり、自由に絵柄は選べるようにとさまざまな種類を用意している。勝つことの喜びはもちろんだが、日本の絵はがきを通して、さらに日本に興味を持つことができるようにとの意図があった。

3.3 学習指導案

Lesson title: 「What are there annual events ?」

Lesson Author: Chisako Yasuda

Date: September 2009

Grade Levels: 5

Subject: Multicultural Education

Description: This lesson, students notice that there are characteristic event for each country. Knowing the Japanese event. And founding the interest of difference and similarity between Japan and America through this game.

Goal: This lesson will encourage students to develop a respect for their own culture and different one.

Objectives:

1. Understand that there are similarity and differences between Japanese and American annual events.

2. Be interested in Japanese culture and own culture.

Materials, resources and Technology: Picture of Japanese annual events, Sugoroku game set, CD, Japanese post card

Procedure:

Activity	Instruction of teacher	Materials
<p>1. Know the Japanese annual events. Watch some pictures about the Japanese annual events. (①New Year's Day, ②The Doll's Festival, ③The Star Festival)</p>	<p>1. Explain this lesson's and activity "Let's play annual events Sugoroku". And, Teacher say emphasize "events". Show some picture of Japanese annual events and introduce them.</p>	<p>• Picture of Japanese annual events</p>
<p>2. Understand how to play the Sugoroku game.</p>	<p>2. Explain how to play Sugoroku game, and make some group. Distribute Sugoroku game to each groups.</p>	<p>• Sugoroku game set, CD • Japanese post card</p>
<p>3. Play the "annual events Sugoroku game".</p>	<p>3. Assist some group .</p>	
<p>4. Convey a impression that this class. And Lesten to the teacher's impression on the class.</p>	<p>4. Give a prize to winner. Sum up the lesson's point.</p>	

3.4 授業の実際

(1) 導入（代表的な日本の年中行事の紹介を聞く）

冒頭で、子どもたちに、日本の年中行事で何か知っているものはあるかと訊ねたが、誰も知らないという反応であった。ここでは、日本の年中行事でも特に特徴的で有名なものを写真を使って紹介した。子どもたちの反応は、興味をもったようではあったが、まだどういったものかイメージがつきにくい様子であった。

(2) スゴロクゲームの説明を聞き、ゲームのグループを作る。

もともと、アメリカにもスゴロクに似たゲームがあるらしく、説明を聞いて大まかなルールは理解できていた。グループのメンバー分けでは、短時間でさっと動き、すぐにゲームに取り掛かることができた。

(3) 各グループでスゴロクゲームを行う。

ゲームは三人一組の少人数グループを作り、ミッションをこなしながらコマを進めるものであったが、ミッションの中には、一人でできるものから、グループの仲間に協力をしてもらってはじめて達成することができるものもあった。例えば、「日本語で“こんにちは”と5人の先生にあいさつしなさい」というものを用意しており、止まった児童は恥ずかしそうに挨拶をしていた。また、「クリスマス」では、「グループ全員でクリスマスソングを一曲歌う」というものを準備しており、恥ずかしがるのではないかと心配をしていたが、グループみんなで歌うということもあり、楽しそうに歌っていた。中には、早く終わったグループの子どもたちも、他のグループの歌に合わせて合唱する場面もあり、暖かい雰囲気であった。一回目のゲームが早く終わったグループは、二回目を始めるところもあり、全体的に積極的に参加していたと思われる。



写真1 【コマの折り鶴とサイコロ】

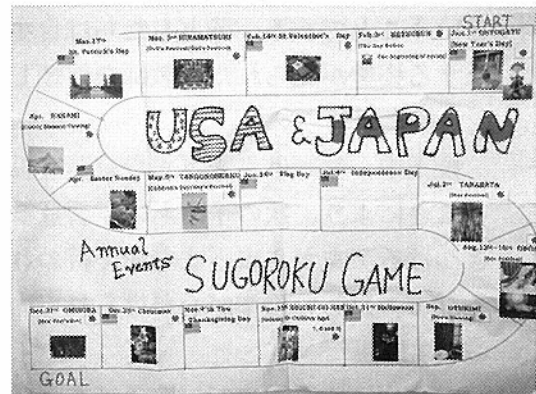


写真2 【スゴロクゲームのシート】

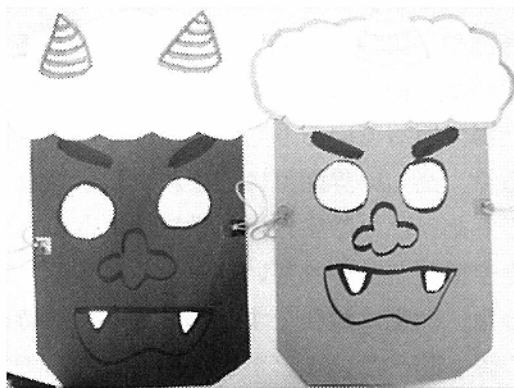


写真3 【2月節分 鬼のお面】

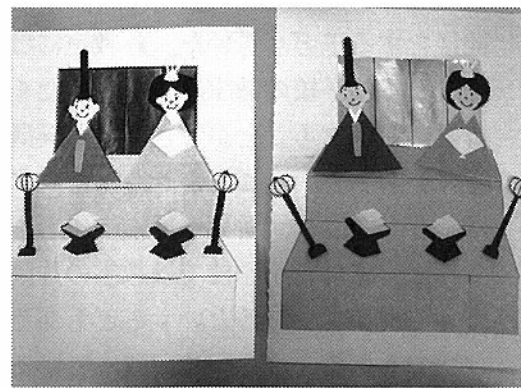


写真4 【3月ひな祭り】

3.5 考察

日本の年中行事について学ぶという活動は、初めてであったらしく、どの子どもも興味深そうに授業に参加していた。

スゴロクゲームでは、ミッションをこなそうと白熱をしている子どもや、早くゴールをしたいと願いを込めてサイコロを振っている子どももいた。ゲーム中には、グループの中で協力し合う場面や、終盤では学級全体で歌いだすなど、団結しているようにも思えた。

ゲームを活動に取り入れることで、子どもの参加率も上がり、楽しんで年中行事を知ることができたのではないかと考えられる。

課題としてあげられるのは、まずスゴロクゲームの教具作りにとっても時間をかけてしまい、授業の流れがしっかり練れていなかったことである。行事の説明や最後の授業のまとめでは、話す言葉を書いた紙をそのまま読んでしまい、自分の言葉で授業をすることができなかった。授業者と児童の間に言葉の壁を痛感した授業だった。教材に頼ってしまい、もっと発問や指示を明確にしていく必要があった。また、ミッションがわかりづらいものがあり、全体での説明や内容をシンプルなものへなど改善の必要があったと考えられる。また、最後のまとめの部分では、ただ自分の考えを主張して終わってしまったので、児童から授業の感想や日本の行事や文化でおもしろかったものなどを述べさせても良かったと思う。

4 体験型教育実地研究における自己変容

4.1 教育観の変容

① 子ども観

アメリカの子どもと出会って一番初めに感じたことは、どの子どもも生き生きしているということである。子どもたちは自主的に行動し、授業の中には積極的に教師に関わろうとする姿勢が見られた。教師を信頼し、尊敬している様子が感じとられた。

② 授業観

授業中、教師はさまざまな言葉を投げかける。そのほとんどが褒め言葉であった。褒めることにより、次の子どもの学習意欲を沸き立たせているように感じた。また、授業にひきつける工夫がさまざまな所で行われていた。教師の発問の仕方や魅力的な教具を用意するなど、楽しい授業が心がけられているようであった。

③ 学校観

学校や地域によって、特色はまったく違っていたが、どの学校の子どもたちも初対面の私たちが温かく迎え入れてくれた。中には、日本人とわかると「こんにちは」と日本語で挨拶をする子どももいた。各教室には、学級目標や学習時の姿勢など、掲示板がとても多く、日本の学校の教室風景とまったく異なっていた。初めはこのようにぎやかな教室で授業に集中することができるのか疑問であったが、周っているうちに、すべての掲示板に意味があるということがわかった。教室は明るく、楽しい雰囲気に入れ込まれ、掲示板などには子どもを励ます言葉や授業の思考を促すものもあった。教室自体が教材のようにも感じられた。また、小学校では教室の片隅にマットや絨毯がひかれているところが多く、床に座って授業を受けるということもあるようだった。教室は勉強をする場であり、同時に遊び場でもあるような印象が残っている。学習の際、調べたいことが手に届くところでできるようにも感じられた。子どもたちが自主的に活動しやすい環境が作られていた。

4.2 自分自身についての変容

本研修において、改めて事前の準備や教材研究学の必要性を感じた。日本の伝統を他の国の子どもに伝えるということの難しさはもちろんだが、自分自身が自国の文化について十分に理解していなかった。授業中、アメリカの女の子に「雛人形の二人は、実在した人物なの？」と聞かれた時、すぐに答えることができず、曖昧な答えを残してしまった。自分たちの文化を教えるということは、自分たちの文化を本当に理解していなければできない。準備の段階でも感じたが、私自身、日本の文化についてあまり知らないことに気づかされ、国際交流や異文化理解と言葉では言うが、他を知る以前に自分たちの国や文化についても学習する必要があるのだと感じさせられた。

また、相手の文化についても曖昧な情報で向かうことの怖さを感じた。宗教や文化、伝統、習慣など、全くちがう環境の中に入るといことは、覚悟と理解が必要である。特にアメリカは様々な、人種や宗教、文化や伝統が混ざり合っている。日本以上に宗教や言葉の表現などに気を配る必要があり、同時に理解し受け容れていくことも重要だと思った。

そして、授業者と学習者間のコミュニケーションの大切さについても改めて気づかされた。言葉の壁があっても、まず伝えたい、聞きたいという気持ちが最も重要になってくる。今回の体験を通して、一番伝えたい事をどのようにして伝えるのか、手段の工夫や、異文化の人に相互理解できるような場をどう設定するのか考えることができた。国際交流、異文化理解の学習の中で、自国の文化を他の国の人に伝えるということも大切だと感じた。

4.3 グローバルマインドに関する変容

今回の体験を通して、改めてアメリカ文化のよさに気がつくことができた。今まで、アメリカの治安やアメリカ人に対して少し怖いイメージを持っていた。しかし、実際に現地に行きさまざまな人たちに出会い、自分は偏見を持っていたのだということに気づかされた。文化のギャップはあったが、外国人という偏見がアメリカの方が日本人よりもはるかに少ないのではないかと思う。アメリカは「人種のるつぼ」という言葉は以前から聞いていたが、現地には本当にさまざまな人種や文化があった。日本にいと、見た目から外国人は目立ってしまうが、アメリカは外国人がいることは当たり前であり、何人であろうと受け入れる風土があった。

近年は国際化社会だといわれ、国際交流や異文化理解が必要とされるが、まさしく日本の将来をアメリカのショッピングモールで感じた。

また、今回の体験の中で、私の想像をしていたよりはるかに多く、日本の物がアメリカの生活に関わってきているということがわかった。例えば、日本車やアニメ、日本食などがある。しかし、中には日本の文化が間違っって伝えられているものもあり、衝撃を受けた。これは、日本でも同様のことが言えるのではないか。他の文化に対して、中には間違っった理解をしているものもあるのではないだろうか。本当の理解とは、他者やメディアからの情報だけに左右されるのではなく、自分が実際に見たり、聞いたりする体験を通して、自分の中に落とすことではないかと思う。異文化交流をする際、知らないうちに間違っった情報を与えている可能性もあるため、できる限り多くのものにふれさせ、実際に現地の人と交流するなどのかわりも必要だと考える。

5 おわりに

今回の体験型海外実地研究の体験を通して、多くのことを学ぶことができた。この貴重な経験は、忘れられないものになりました。

最後に、このような機会を与え、計画・実施して下さった GPSC の関係者の先生方および、ノースカロライナ州で私たちを受け入れて下さった関係者の方々に、心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- ・江口裕之、ダニエル・ドゥーマス『英語で語る 日本事情』ジャパントイムズ、2001
- ・植田一三、上田敏子『英語で説明する 日本の文化』語研、2009
- ・講談社インターナショナル株式会社『対訳 日本事典 The Kodansha Bilingual Encyclopedia of Japan』講談社、1998